

『押絵と旅する男』

丁度その時、兄は非常に興奮した様子で、青白い顔をぼつと赤らめ息をはずませて、私の方へやって参り、いきなり私の手をとって『さあ行こう。早く行かぬと間に合わぬ』と申して、グングン私を引張るのでございます。引張られて、塔の石段をかけ降りながら、訳を尋ねますと、いつかの娘さんが見つかったらしいので、青畳を敷いた広い座敷に坐っていたから、これから行っても大丈夫元の所にいると申すのでございます。

兄が見当をつけた場所というのは、観音堂の裏手の、大きな松の木が目印で、そこに広い座敷があったと申すのですが、さて、二人でそこへ行つて、探して見ましても、松の木はちゃんとありますけれど、その近所には、家らしい家もなく、まるで狐きつねにつままれた様な塩梅あんばいなのです。兄の気の迷いだとは思いましたが、しおれ返っている様子が、余り気の毒なものですから、気休めに、その辺の掛茶屋などを尋ね廻つて見ましたけれども、そんな娘さんの影も形もありません。

探している間に、兄と分れ分れになつてしまいましたが、掛茶屋を一巡して、暫しばらくたつて元の松の木の下へ戻つて参りますとね、そこにはいろいろな露店に並んで、一軒の覗きからくり屋が、ピシャンピシャンと鞭むちの音を立てて、商売をして居りましたが、見ますと、その覗きの眼鏡を、兄が中腰になって、一生懸命覗いていたじゃございませんか。『兄さん何をしていらっしゃる』と云つて、肩を叩たたきますと、ビックリして振向きましたが、その時の兄の顔を、私は今だに忘れることが出来ませんよ。何と申せばよろしいか、夢を見ている様な何でも申しますか、顔の筋がたるんでしまつて、遠い所を見ている目つきになって、私に話す声さえも、変にうつろに聞えたのでございます。そして、『お前、私達が探していた娘さんはこの中にいるよ』と申すのです。